

上海理工大学交流プログラムの現状と展望

加治 敏之・酒井 峰男

Student Exchange Program with University of Shanghai for Science and
Technology - Present and Future
Toshiyuki KAJI・Mineo SAKAI

キーワード：交流プロジェクト 日本語能力 コースデザイン プロジェクトワーク
短期語学文化研修

岡山大学と上海理工大学との交流の一環として、相互に研修生を派遣する語学文化研修プログラムが始まって二年になろうとしている。独自に築きあげた日本語教授法を中心に本プログラムを紹介し、今後の展望についても論ずる。

はじめに

岡山大学言語教育センターでは2011年度より、中国上海市の上海理工大学との間で相互に12名の学生を送り出し、語学教育を中心とした短期研修プログラムを実施していて、岡山大学では「上海理工大学交流プログラム」、上海理工大学では「日本岡山大学語学研修」と称している。

2012年9月現在、岡山への受入れ事業を2回、上海への派遣事業を1回実施しており、現在進行中の交流プログラムである。日本の地方都市において2週間という短期間、かつ少人数構成なので一見ささやかなものに見えるかもしれないが、学生の実情に合わせた柔軟できめ細やかな指導体制の確立に取り組み、とりわけ日本語教育の分野で新しい試みを行い、個性的で有意義な研修システムとして定着しつつあると自負している。

準備期間を含め2年間経過し経験の蓄積を実感してきたこともあり、今回、本プログラムの現状に至る道程と現状を記録することで後の展望を開く材料とすべく、本稿は作成された。

本稿では、主に上海理工大学の学生が岡山大学で学ぶ夏期研修、その中でも2012年7-8月に行われた第2回の研修を中心に論じていく。(岡山大学生の第1回派遣は2011年夏期だったが、その後春期に変更となり第2回は2013年3月に行われる。上海理工大学での研修実態についてはややデータが不足しており、いずれ機を改めて報告できればと思っている。)

本稿は二部構成からなっている。

第1部は、交流プロジェクトの全体像や沿革、支援体制などを紹介しながらその特色ある部分について詳述し、岡山大学の外国語教育における本プロジェクトの位置づけを論ずる。

第2部は、日本語授業の具体的な記録を示しつつ、教授法の確立とそれを試みる姿勢について論じている。

第1部は加治敏之、第2部は酒井峰男が執筆した。

第1部

1. 上海理工大学交流プログラムの沿革

上海理工大学は上海市の市立重点大学で百余年の歴史があり、工学系学部を中心としながらも外国語学院や出版学部などを擁し、日本語教育にも力を入れている。日本語を専攻する学生のみならず副専攻として日本語を選択する学生も多く、全体の日本語能力はかなり高い。

岡山大学と上海理工大学の交流は、2010年夏、中国語を学習する岡山大学学生と中国語教員が行った上海・蘇州研修旅行に始まる。たまたま引率教員の一人が上海理工大学で教鞭をとっていた縁により、日本人学生による大学訪問を希望したところ、上海理工大学の日本語学習学生と教員諸氏に歓待された。当時、上海理工大学は対外交流推進戦略を立ち上げた時でもあり、その後両大学の間には研修生交流等を目的とした大学間交流協定が順調に締結され、同年夏、それぞれの大学において第1回の短期語学・文化研修の実施に至った。

上海理工大学交流プログラム（以下、上海理工プログラムとする）における研修の枠組みは、すでに2006年度より岡山大学と韓国・成均館大学校との間で実施している成均館大学校交流プログラム（以下、成均館プログラムとする）に範をとっている。成均館プログラムは参加学生数を見ると上海理工プログラムとほぼ同じだが、期間は3週間とやや長い（上海理工プログラムは2週間）。また上海に比べて参加学生の日本語能力の隔たりがやや大きく、これらに起因して日本語教育や研修の内容が異なってくるのだが、紙幅の関係もあり詳細な比較については本稿では割愛せざるを得ない。

これまで実施してきた交流プログラムと関連活動を一覧しておく。（実施予定も含む。）

2010年

8月 岡山大学生（25名）と教員（4名） 上海・蘇州への研修旅行 大学間交流協定の締結を目指すことを確認

2011年

2月 上海理工大学生（2名）引率教員（1名）、岡山大学にて成均館プログラムの日本語・日本文化研修に参加・視察（1週間）

6月 大学間交流協定の締結

7・29～8・12 岡山大学にて、第1回日本語・日本文化研修 実施

8・28～9・10 上海理工大学にて、第1回中国語・中国文化研修 実施

2012年

6月 上海理工大学にて、参加学生に対するレベルチェックテスト 実施

7・22～8・5 岡山大学にて、第2回日本語・日本文化研修 実施

2013年

3・3～9・17 上海理工大学にて、第2回中国語・中国文化研修 実施予定
（研修に参加した学生数は毎回12名、引率教員は1～2名。）

2. 研修の内容と日程

本プログラムの構成と内容について具体的に説明する。「はじめに」で述べたように、本稿では主に岡山大学における日本語授業について論ずるので、実際に配布された本年7～8月研修の日程表に即して紹介していきたい。（表1参照）

日本語の授業は3名の非常勤講師が分担し、午前中2コマ（90分×2）、月曜から金曜まで2週間、計20コマ（30時間）行った。教材は上海理工大学学生のレベルに合わせたテキストを、酒井峰男教員（以下、敬称略し酒井とします）等によって作成した教科書を使用した。午後に酒井の個別授業があるが、学生にとっては一人20分ほど酒井と面談を行うもので、会話練習を兼ねている。これによって得られた情報は、他の教員と共有され授業や生活指導に反映される。後半週の午後には日本語による調査と発表を中心としたプロジェクトワークが入るが、詳細は第2部（酒井執筆）に譲る。授業最終日の「研究発表会」は研修生にとって「卒論」のようなもので、プレッシャーは大きいですが、日本人学生の協力を得て原稿を完成させ発表会を無事終えると研修生たちの達成感は最高潮に達した。

平日の午後は、研修生と日本人学生のサポーター（本プログラムではチューターと称する）が相互学習を行えるよう、コンピュータと冷蔵庫を備えた適度な広さの部屋（初修系図書室）を学生控室とすることで自由に語りあえる場を提供し、教員は学生どうしの自発的な交流を見守り後方の環境整備につとめた。前半週は岡山大学が期末試験期間ということもあり双方の参加者はまばらだったが、発表が近づくにつれ参加者は増え熱気が溢れていった。最終日の研究発表会は多くのチューターと教員の参加により大盛況であった。

日本文化研修として、前半週午後には倉敷美観地区見学および西大寺地区のクリーンセンター見学、また後半週に後楽園見学を実施した。さらに中間の土曜日には大阪へのバス旅行を行ったが、これには日本人チューターも多数参加し、車中での会話も含め見学や街歩き・買物などは交流を深める良い機会となり、その後の発表準備作業が順調に進むことにつながった。

表1 日程表

2012年7 - 8月 第2回 上海理工大学交流プログラム日程表						
		1限	2限	3限	4限	5限
		8 : 40-10 : 10	10 : 25-11 : 55	12 : 45-14 : 15	14 : 30-16 : 00	16 : 15-17 : 45
7/22	日	岡山空港到着12 : 15 14 : 00頃 岡山大学国際交流会館へ (オリエンテーション、宿舎使用説明など)				
7/23	月	8 : 20-8 : 40 授業について (酒井) 日本語 話す	日本語 書く	キャンパスツアー 初修系図書室に集合 13 : 00	個別授業 (酒井) C 307	歓迎会 (18 : 00~20 : 00) 生協食堂 (ピーチ4階)
7/24	火	日本語 話す	日本語 書く	理事訪問 初修系図書室に集合 12 : 45	個別授業 (酒井) C 307	個別授業 (酒井) C 307
7/25	水	日本語 話す	日本語 書く	倉敷美観地区など見学 本部棟前 (農学部北) 集合13 : 30~18 : 30		
7/26	木	日本語 話す	日本語 書く	日本文化授業		
7/27	金	日本語 話す	日本語 書く	西大寺 東部クリーンセンター見学 本部棟前集合12 : 30~16 : 30		
7/28	土	研修旅行 大阪海遊館 道頓堀 など 本部棟前7 : 50集合 ~19 : 30				
7/29	日	自由行動				
7/30	月	日本語 話す	日本語 書く	個別授業 (酒井) C 307		後樂園幻想庭園見学 (17 : 20 岡大西門 集合)
7/31	火	日本語 話す	日本語 書く	個別授業 (酒井) C 307	個別授業 (酒井) C 307	
8/1	水	日本語 話す	日本語 書く	プロジェクトワーク 実施	プロジェクトワーク 実施	
8/2	木	日本語 話す	日本語 書く	プロジェクトワーク 実施	プロジェクトワーク 実施	
8/3	金	日本語 話す	日本語 書く	研究発表会 (15 : 30~17 : 30) B 22 歓送会 (18 : 00~20 : 00) 生協食堂 (ピーチ4階)		
8/4	土	自由行動				
8/5	日	帰国 国際交流会館11 : 00出発 13 : 10離陸				

3. 教員の支援および学生チューターの役割

日本語授業については酒井ほか4名の非常勤教員が担当したが、生活支援や諸連絡・研修の引率などの分野は岡山大学言語教育センター初修系教員（10名）が全員参加で取り組んだ。中心的に活動したのは3名の中国語教員と久保田聡初修系長（ドイツ語）であるが、仕事量はかなり多くドイツ語・フランス語・韓国語の各教員から熱心な協力を得ることで無事終了することができた。夏期研修の後方支援は初修系教員の語種を超えての共同作業であり、広く外国語を教え学ぶ場に関わることで（中国語以外の外国語教員も）視野を広げ経験を深めることができた。また研修生にとっても、日本人教員との会話から多様なテーマにわたり専門的な知識を得る新鮮な経験となった。

午後（自習時間）は、学習支援と交流のため岡山大学生によるチューター制度を採り入れた。当番を決めて控室で待機し、随時相談や会話に応ずるというもので、成均館プログラムで行われているのを踏襲している。6月に中国語を学ぶ学生に対してチューター募集を行い、30名ほどの登録があった。授業の予習復習や発表の準備といった学習支援に加え、さまざまな分野にわたり同世代どうしで語る機会は、両国の学生にとって有意義なものとなった。大阪へのバス旅行にはチューターの半数ほどが参加し、これを機に研修生とのコミュニケーションは深まりを見せ、後半週のプロジェクトワークを行う推進力となっていった。成均館プログラムに比べれば短い時間なのだが、学生間に培われた交流とチームワークの強さは、遜色のないものであった。チューターたちは最終日の研究発表会と歓送会にも多数参加し、友情に満ちた雰囲気醸し出してくれた。上海の学生たちは2週間の研修を十分に満足して締めくくることができ、チューターの存在は本プロジェクトの中でもっとも高い評価を得ている。（後述、「アンケート結果」参照）

学生チューター制度の優れた点は、一過性の支援に終わらず、夏期研修で培った経験をふまえ春の派遣プログラムへ志願する可能性が高いことである。多くのチューター経験者は、新しくできた友人に会うため来春のプログラムに応募するとの意思を示している。これは、以後半年の中国語学習に具体的・確実な動機付けを自ら設定することであり、その後の学習意欲の高まりやさらなる中長期留学への「呼び水」になるという好循環が期待できる。強制や競争的な学習と対極的な地点にあるものとしてこれからの語学教育への導入をといえよう。

4. アンケートの結果とまとめ

学生の反応を把握するために、第2回夏期研修のアンケート結果をそのまま紹介する。これは授業最終日に12名の研修生全員から回答を得たものであり、集計と入力にあたって久保田聡系長の手を煩わせたことを、感謝の念とともに記しておく。

研修生の評価は、全項目にわたり「とてもよい」「よい」がほとんどを占めているが、特に高い評価を受けたものについてコメントしておく。

「Ⅳ 午後の授業等について 質問1 「1人22分の個別授業」について」

「Ⅴ その他 質問3 チューターとの交流について」

この2項目への評価は、ともに「とてもよい」が11名・「よい」が1名で、最も高い評価を受けている。

「チューターとの交流について」への評価は、学生が一方向的な授業だけでなく習得した日本語を現場で実際に使用できたことに達成感を味わった、と考えることができよう。また「個別授業」への評価は、会話の中でそれぞれの学生のレベルを測りそれに合わせた学習プラン・問題設定な

どへ導こうとする「オーダーメイド」の姿勢が理解されたもので、この両者は互いに相乗効果を発揮し研究発表会が成功裏に終わる原動力になったと考えられる。

今回は研修生の日本語能力が平均して高めで、またチューターたちとの相性もたまたまよかったという幸運に恵まれたこともありプログラムに対する満足度がかなり高かったともいえるが、総じて研修生たちがどのような学習・交流環境を求めているかを認識することができた。

研修期間の短さについては不満が多かったようである。予算などの制約もあり当面延長は難しいが、学習効果との関係を分析し検討を要する課題なのかもしれない。

学生のレベルとニーズに耳を傾けそれに寄り添いながら進んでいく、いわば「手作り感」に溢れたこのプロジェクトは、多くの教員・学生の支援とボランティア精神に支えられている。評価の高かったのは嬉しいことだが、その労力があまりに過大なものになると持続可能性の壁が現れてくるだろう。経験を積み重ねながら程よいバランスを取ることができるよう、また新たな一步を踏み出していこう。

第2回上海理工大学交流プログラムアンケート結果

(回収枚数12通中12通)

I プログラム全体について

質問1	プログラムへの評価	とてもよい	8
時間もっと長いほうがいいです。一ヶ月ほうがいい。		よい	3
		まあまあ	1
		あまりよくない	0
		よくない	0

質問2	授業のレベル	高すぎる	2
先生はまじめで能力はだんだんあがっています。		少し高い	1
		ちょうどよい	9
		少し低い	0
		低すぎる	0

質問3	プログラムの科目数	もう少し多い方がよい	2
日本語書く授業が多くて話す授業はすくない。		ちょうどよい	9
		もう少し少ない方がよい	1

質問4	プログラムの期間	もう少し長い方がよい	10
二週はたりない 岡山はいい町だから、もう少ししたい。		ちょうどよい	2
		もう少し短い方がよい	0

質問5	望ましい開催時期	3月	1
7月のはじめから8月のはじめまで一ヶ月		7月上旬	1
		7月	4
		8月	5
		9月	1

質問6	研修旅行について	とてもよい	3
もう少し長いほうがいい 時間はあまり多くない 自由時間をちょっと伸ばしたほうがいいと思う。 とてもすてきな体験だが、やはり時間がたりない……	よい	8	
	まあまあ	2	
	あまりよくない	0	
	よくない	0	

質問7	プログラムの終わりに口頭発表し、報告書の資料を一部作成することについて	とてもよい	7
自分の能力がどのくらいあがるのがわかります。	よい	5	
	まあまあ	0	
	あまりよくない	0	
	よくない	0	

II 午前の1時間目の「話す」授業について

質問1	「話す」授業は？	とてもよい	3
自分の話す時間がない、もっと話すほうがいい	よい	8	
	まあまあ	1	
	あまりよくない	0	
	よくない	0	

質問2	「話す」に自信がついたか	とても自信がついた	2
話す時に、間違ったところが先生たちとチューターたちに注意させてほしいです。 日本の方と直接話したら、自分のたりないところが十分分かった。	少し自信がついた	8	
	あまり変わらない	1	

質問3	「話す」の教材は？	とてもよい	3
話しというとなにも考えない、ただの話すほうがいいです	よい	8	
	まあまあ	1	
	あまりよくない	0	
	よくない	0	

質問4	「話す」の講師の教え方は？	とてもよい	3
	よい	9	
	まあまあ	0	
	あまりよくない	0	
	よくない	0	

質問5	「話す」のシラバスは？	とてもよい	5
	よい	7	
	まあまあ	0	
	あまりよくない	0	
	よくない	0	

Ⅲ 午前の2時間の「書く」授業について

質問1	「書く」の授業は？	とてもよい	3
		よい	9
		まあまあ	0
		あまりよくない	0
		よくない	0

質問2	「書く」に自信がついたか	とても自信がついた	0
		少し自信がついた	12
		あまり変わらない	0

質問3	「書く」の教材は？	とてもよい	5
		よい	7
		まあまあ	0
		あまりよくない	0

質問4	「書く」の講師の教え方は？	とてもよい	5
		よい	7
		まあまあ	0
		あまりよくない	0
		よくない	0

質問5	「書く」のシラバスは？	とてもよい	6
		よい	6
		まあまあ	0
		あまりよくない	0
		よくない	0

Ⅳ 午後の授業等について

質問1	「1人22分の個別授業」について	とてもよい	11
	大好き、もっと多いが欲しい 酒井先生がとてもやさしくて、先生との会話はたのしかった。	よい	1
		まあまあ	0
		あまりよくない	0
		よくない	0

質問2	「倉敷、後楽園幻想庭園見学」について	とてもよい	4
	美観地区の見学時間が短かったです。 後楽園の見学はとても楽しかったが、倉敷の美観地区はもっとゆっくり見学したい。	よい	7
		まあまあ	1
		あまりよくない	0
		よくない	0

質問3	「西大寺、クリーンセンター見学」について	とてもよい	5
西大寺？ 中国もそういうゴミ処理所があればいい		よい	6
		まあまあ	1
		あまりよくない	0
		よくない	0

質問4	午後の「日本文化授業」について	とてもよい	4
日本語だけでなく、もっと文化的なものを知りたい		よい	5
		まあまあ	3
		あまりよくない	0
		よくない	0

V その他

質問1	宿泊所について	とてもよい	10
宿泊所は思った以上すてき		よい	2
		まあまあ	0
		あまりよくない	0
		よくない	0

質問2	PCなどの設備について	とてもよい	7
発表の準備するところにW I F Iがあれば、資料の収集に便利です。		よい	5
		まあまあ	0
		あまりよくない	0
		よくない	0

質問3	チューターとの交流について	とてもよい	11
チューターさんたちはとても熱情で、いろいろ助けてくれた。		よい	1
		まあまあ	0
		あまりよくない	0
		よくない	0

VI 後輩へのメッセージ

- ・チューターさんと一緒に行動がいい。授業のときまじめてくれ。すすめ場所、駅とくらしき
- ・岡山は「晴れの国」だから、傘とか自分で用意したほうがいい。日焼けになりやすいから。
- ・うちの大学は日本人の留学生がいないので、日本語を自然に話せるチャンスがあまりないので、普段の勉強には話す能力についてもっと練習しなければならないと思う。
- ・このプログラムはとてもいい機会ですから、この二週間の生活をしっかりつかめて自分の日本語能力を高めてください。
- ・先生とチューター達はとてもやさしいから、なにか質問があれば聞いてください。
- ・ちゃんと勉強して、ゆっくりゆったり日本ですごしてね。
- ・いい機会ですから、大切にして、よく勉強して、話す能力も高められます。チューターとよく話してください。
- ・①「B-mobile」を日本に来る前に用意したほうがいい。②岡山および近くの地図をちゃんと持

て来て、役に立つから。③電子辞典も用意して、それより自分の日本語能力を上げなければなりません。

- ・自転車を前もって練習すること。また、積極的にチューターたちと交流すること。
- ・チャンスがあればぜひきてください。いい思い出になるにちがいない。でも生活用品をそろって来たほうが良いと思う。

VII 自由記述

- ・自由活動の時間はもっと長くしてほしいかとも思います。
- ・その、研修旅行の時間がすこしきつくて、長いほうが良いとおもいます。そして22分の個別授業はたりないと思います。もっと多いが良いです。またもしできれば、チューターと一緒に暮らしたほうが良いです。なぜなら、一緒に暮らすなら話し時間も多くなります。歓迎と感想の時、岡大の学生の特技を見たい。そして中国の学生もう自分の特技を演じる。もっと楽しくなります。最後、ももが美味しい。
- ・もしよかったら、チューターさんたちと一緒に授業をうけたい。
- ・刺身はまた食べなかったのも、ちょっと残念です。岡山は静かな城ですね。山も緑もたくさんあります。本当にいいところです。
- ・水泳に行く？
- ・チューターと一緒に授業に出たり、遊んだりしたい。
- ・個別授業が好きです。
- ・文化的なもの、あるいは、日本独特な現象を紹介してくれたら、授業がもっとおもしろくなると思います。
- ・先生方とチューターたちにお礼を言いたいです。やさしくしてくださって、またいろいろな体験させたりして心から感謝しております。二週間大変お世話になりました。
- ・とてもすてきなプログラムです。先生方々とチューターの皆さん、心から感謝しています。本当にありがとうございました。

第2部

上海理工大学交流プログラムのコースデザイン

酒井 峰 男

どのコースデザインにおいても、その作成のために検討すべき事項は、主なものだけでも、予備調査、到達目標、学習活動の種類、タスク、シラバス、スケジュール、教材、評価方法、というように多々ある。今回、プロジェクト・ワークを中心に据えたコースデザインを作成した。これにより、大学間短期交流プログラムのコースデザインの一つのあり方を示せた。

1. はじめに

どんなプログラムでも、その中に教室活動がある限り、コースデザインが必要になる。今回の報告は第2回目の上海理工大学交流プログラムについてである。2011年8月、岡山大学での第1回上海理工大学交流プログラムの立ち上げの話を聞いた時、そして、そこで実施される日本語教育のコースデザインを任された時、最初からプロジェクト・ワークしかアイデアが浮かばなかった。そんなわけで、このプログラムのコースデザインの中の学習活動の種類として、早い段階よりプロジェクト・ワークに的を絞ったわけであるが、ただちに次のようなことについて自問することとなった。2週間の交流プログラムでできるプロジェクト・ワークとは一体何であろうか。岡山に来てよかった、と最終的に参加者に言わせめるような交流プログラムとはどんなものであろうか。何を提供すれば、勉強になってよかった、と参加者に思ってもらえるだろうか、等々である。あらかじめ分かっていたことと言えば、参加者の在籍大学が同じであり、かれらの日本語能力のレベルは同一ではなく、海外経験もはじめてである、ということぐらいである。彼らが置かれた現状の言語環境の中で、もし、参加者個々のレベルアップを促すための教室活動を実施するだけでは、時間的に中途半端に終わってしまうことがまず心配された。2週間の「超短期⁽¹⁾」交流プログラムの中で、参加者個々の日本語能力に頼るだけでは、活動時間も活動範囲も限られてしまう。参加者や教員にストレスだけが広がっていくような状況は避けねばならない。また、プログラムでは、交流の名にふさわしい、ここ岡山でのインタラクションが第一に重視されなければならないだろうし、それに沿った形の学習活動が保障されなければならないだろう。願わくば、活動成果が最終的に目に見える形で参加者に認知してもらえるようなものであれば、さらによいであろう。彼らの今後の日本語学習をサポートするのに役立つ日本語・日本文化交流プログラムとは何か。交流の過程を通して目に見える形で協働活動の成果があげられるプログラムとは何か。それらを実現するためのコースデザインの模索がまず第1回目であり、今回の第2回目もそれを引き継ぐ形で模索を続けることとなった。

ここでは、第1回目の経験を踏まえた上で、今回の第2回上海理工大学交流プログラムのコースデザインについて報告したい。

2. コースデザインの設定のための事前調査

前記したように、第1回目のプロジェクト・ワークを踏襲することは決まっていたわけであるが、順番として、今回も学習者のニーズ調査、目標言語（＝日本語）調査、レディネス調査⁽²⁾といった事前調査を最初にしておく必要がある。つまり、ニーズ調査とは、学習者がどんな領域において日本語を必要としているか、学習者が学習したいことは何か、である。また、目標言語（＝日本語）調査とは、実際の言語使用場面での状況はどうか、困難さがあるとしたら、それはどこにあるのか、である。さらに、レディネス調査とは、日本語の学習状況や学習にかかわる準備状況はどうか、学習者にできることは何か、である。このように、さまざまな面から目標言語である日本語と学習者との関係を最初に調べておくのが事前調査である。

今回、プログラムの開始3か月前に、事前調査として、簡易化された、折衷された形でのニーズ調査とレディネス調査を、また、目標言語調査として日本語に関するテスト（旧日本語能力試験を基に作成された文法テスト、それに談話構成テスト⁽³⁾と作文テスト）を現地で実施した。そのテストの結果を表1にまとめた。

表1：上海理工大学レベル判定テスト結果（表の中の*印は「要注意」の意味）

学生	談話構成 (筆記 話す 30点)	文法 (80点)					作文	総合 判定	備考 (自己申告) 太字はコーディネーターからのコメント
		合計	4級	3級	2級	1級			
A	21	74	20	19	19	16	上級	上級	1級・900時間・敬語に興味
B	17	74	20	20	17	17	上級	上級	1級・600時間・岡山弁に興味・テーマ：上海旅行ガイド
C	17	76	19	19	19	19	上級	上級	1級・900時間・敬語に興味
D	16	71	19	17	17	18	上級	上級	2級・900時間
E	*13	73	20	19	17	17	上級	上級	1級・900時間・会話と翻訳に興味・来日経験1回・「話す」弱い
F	*0	68	19	16	16	17	中級(上)	中級(上)	1級・900時間・会話に興味・マスコミの記者希望・「話す」弱い
G	17	64	19	14	16	15	中級(上)	中級(上)	3級・600時間・通訳
H	13	64	19	15	14	18	中級(中)	中級(上)	2級・900時間・日本で中国語教師希望
I	18	55	15	14	12	14	中級(上)	中級(中)	2級・900時間・会話に興味・来日経験1回・「文法」弱い
J	17	62	19	15	12	16	中級(中)	中級(中)	2級・900時間・会話に興味・会社員希望
K	19	71	19	17	17	18	*中級(下)	中級(中)	2級・900時間・会話に興味・日本で会社員希望・「書く」弱い
L	—	—	—	—	—	—	上級	—	2級・900時間・来日経験3回以上・日本語教師希望

これらの事前調査を行うことにより、参加者のみならず、受け入れ側においても交流プログラム実施に向けての機運が高まってくる。これも、この調査の重要な役割の一つである。

レベル判定結果により、プロジェクト・ワークに向けてのコースデザインの全体像がより具体的なものとして見えてくる。参加者は同じ大学からの学生達であり、プログラムへの参加の動機

が高いことから、まずはグループ・ワークの実施には特に問題がないと言えそうである。限られた時間の中で個々のレベル差を乗り越えて、互いに協働して活動するインタラクション重視のグループ・ワークの形がより具体的に想像できるようになった。また、第1回目と違って今回は全員が日本語学科の3年生であったため、互いをよく知っており、平均的に日本語のレベルが高く、日本語能力が揃っていた。

3. 総合的な教室活動としてのプロジェクト・ワーク

日本では、日本語教育での教室活動として、文型練習、ロールプレイ、タスク、などがあるが、プロジェクト・ワークもよく利用されている。文型練習以外のその他の教室活動は、言語の形式よりその運用に重点を置いた活動であり、岡崎（2005：610）によると、「これらの活動は、言語を意志伝達的手段とみる機能主義言語学と人間の認知活動を重視する認知心理学の学習理論に基づくコミュニカティブ・アプローチで典型的に用いられる教室活動である。」ということである。学習活動形態は、教師主導型というより、学習者同士のペア・ワークやグループ・ワークが中心となる、いわゆる、ピア・ラーニング⁽⁴⁾であり、そこでは協働作業が求められる。どちらかといえば学習者中心の教室活動である。

プロジェクト・ワークの内容としては、学級新聞作り、旅行プラン、学園祭の模擬店出店等、さまざまなものがある。今回は日本で生活する中でのプロジェクト・ワークであるので、教室内はもちろんのこと、教室外でも常に日本語環境の中にあり、その状況を最大限に利用することが望ましい。その上で、岡山でしかできないことは何かと問うた場合、自然に活動内容が絞られてくるのではないだろうか。岡山の地元の人達との世代を超えた交流、岡山大学の学生達との同世代間の交流、さらに、個人レベルの交流を考えるならば、市民ボランティア及び岡山大学のチューターとの交流が考えられる。それらを組み合わせたプロジェクト・ワークが有力な候補となる。

今回、プロジェクト・ワークの最終目標はプレゼンテーションに置いた。自分たちが調べたことを最終日に発表するというものである。しかし、ただ口頭発表するだけではなく、発表に向けて参加者にはさまざまなタスクが課される。インタビュー、アンケート調査、ハンドアウトの作成、プレゼンテーション資料の作成、口頭発表時に課されるエピソード⁽⁵⁾の披露などである。このようなプロジェクト・ワークは、参加者の総合技能の活用が強く求められる活動である。そこで必要とされる能力とは、ただ単に四技能（聞く、話す、読む、書く）だけではなく、会話ストラテジー、社会言語学的能力⁽⁶⁾、談話管理能力⁽⁷⁾のほか、パワーポイントの作成などのような技術面でのプレゼンテーション能力も求められる。こうした総合的な日本語運用能力を要求するプロジェクト・ワークの学習活動は、複数の要素を含んだ活動になるはずである。そこではプロジェクト・ワークを実現するための複数のタスクが必ずや伴うであろう。それらのタスクを実現するために、参加者は言語運用能力をさらに高めることが求められる。そのための具体的な学習項目が、いわゆるシラバス⁽⁸⁾であり、それらシラバスに沿って教材が作成され、その教材を使った学習が教室内で実施され、その学習を通して、教室外でタスクが実施されることになる。

以下、表2に今回のプロジェクト・ワークの学習活動の種類と、そこで必要とされる言語運用能力との関係を記した。

表2：今回のプロジェクト・ワークの中の学習活動の種類と必要とされる言語運用能力

	学習活動の種類＝タスク	必要とされる言語運用能力
1	<話す>インタビューをする	会話ストラテジー、社会言語学的能力
2	<話す>口頭発表をする	図表の説明、エピソード（小話）、発表後の質疑応答、 談話管理能力
3	<書く>アンケート調査をする	アンケートの作成、図表作り、報告文の作成、パワー ポイントの作成
4	<書く>資料作りをする	全体の構成、表題、キーワード、要旨、章の数字の書 き方、各章のタイトル、参考文献

4. コースデザインの設定

ここではコースデザインについて述べる。事前調査（ニーズ調査、目標言語調査、レディネス調査）を受けて、次に考えなければならないことは、シラバスデザインとカリキュラムデザインの設定である。前者は教える内容について、後者は教え方である。コースデザインはニーズ調査やレディネス調査の初期の段階から、最終的な評価までを含む全体的なものであるが、シラバスデザインはシラバスを中心としたデザインであり、そこでは学習項目の抽出が行われる。一方、カリキュラムデザインは、最終的な到達目標、段階的な学習目標、教授法、教材、スケジュール表、学習活動、そして、評価方法についてである。が、コーディネーターが一番苦勞するのは、コースデザインの中で大きな比重を占めるシラバスデザインの設定である。コーディネーターからすれば、シラバスデザインが設定されれば、コースデザインの半分以上が組み立てられたような気がするものである。それほど、シラバスデザインは重要で、作成にも時間がかかる。

以下、コースデザインの中でも、今回、特に重要だと思われる項目について、順次述べることにする。

4. 1 「話す」「書く」の授業時間

日本語の時間は午前中の2コマ（1コマは90分）と決まっていた。午後は、文化講義や文化活動、人的交流、プロジェクト・ワークの実施、個別指導（週一回一人22分）に当てられた。その中で、四技能のうち、1時間目に「話す」、2時間目に「書く」と決めたのは、事前調査の中で特に「話す」の希望が参加者から多く出ていたからでもあるが、やはり、「話す」「書く」の両技能は、今回のようなプロジェクト・ワーク、すなわち、参加者自らがインタラクションを通してコミュニケーションをリードしコントロールしていく必要のあるプロジェクト・ワークには、欠かせない、最も重要な技能であるからである。さらに、「話す」「書く」のようなアウトプット型の技能は、学習者にとって、今、自分が何を学習しているかが比較的分かりやすく、要領よく学習を進めれば、短期間でも比較的結果が出やすい技能であり、達成感が得やすい技能でもある、ということも言える。

4. 2 学習活動の種類

学習活動の形態はグループ・ワークに、学習活動の種類はプロジェクト・ワークに設定し、その中に、インタビュー、アンケート調査、ハンドアウトの作成、報告書の資料作成、研究発表、等、四技能が要求されるタスクを加えた。タスクを通してコミュニケーションのスキルを向上させようというものである。第3章の表2にあるように、プロジェクト・ワークの実施には、「話す」「書く」の技能を中心に、さまざまな技能が要求される。教室作業だけで完結するものではないので、

日本語教員（今回は6名）以外の教員も含めた全スタッフの細かいサポートが必要になる。それだけに、プロジェクト・ワークの実施には企画する側のサポートシステムの効率性が問われる。

4. 3 学習項目とスケジュール表

プロジェクト・ワークの中で、「話す」なら「話す」の、「書く」なら「書く」の学習項目を、タスクに沿ってそれぞれの2週間の時間軸に合わせて考えてみた。これが縦軸である。さらに、横軸である、当日の1時間目の「話す」と2時間目の「書く」の流れにも考慮し、全体のスケジュールを作成した。

「話す」に関して言えば、図表を使つての口頭発表練習や、口頭発表の中に挿入されるエピソード（=小話）の作り方の練習を主にした。後者は、あまり他機関ではなされていない練習かもしれない。最終日に予定されている口頭発表会の内容を、より豊かに、よりバラエティーに富んだものにするための工夫である。こういうタスクを加えたのは、比較的日本語能力が高い参加者に、思う存分にその実力を発揮してもらいたいためである。タスクのさまざまな段階でそのグループが持っている実力が露わになるものであるが、参加者にとっては自分たちのレベルに合った成果を示すことができるのが一番いい。日本語能力の高いグループにはそれなりのレベルにふさわしい発表をさせることが必要である。そのためにはコースの中で課すタスクの質が問われることになる。

「書く」に関して言えば、最初の時間で報告文の実例の紹介をすることによって、まずは最終的に何をせねばならないかを指し示し、到達目標を理解してもらおうと考えた。また、1週間目を基礎期とし、その基礎期には、表題、各章の題、章の数字の付け方、参考文献の書き方、アンケート用紙の書き方等、報告文を書く際の規範的な学習の充実を図った。これをしておかないと、応用期と定めた2週目に時間のロスが多くなると考えた。また、ハンドアウト等の実例はできるだけ1期生のものを使用することも考えた。参加者の不安をなくすためであるが、コーディネーターとしては、彼らにさらに上のレベルを目指して欲しいからである。また今回、2週目の2時間目の「書く」の時間はグループ・ワークとし、研究発表の準備をする時間⁹⁾として教室活動の中に入れ込んだ。

以下、表3に学習項目とスケジュール表を示す。

表3：学習項目とスケジュール表

月日	I 時間目「話す」	II 時間目「書く」
7/23 月	<p><オリエンテーション：話す／書く></p> <ul style="list-style-type: none"> ・プロジェクト・ワークの全体説明 <p><I. インタビュー、アンケート調査、会話ストラテジー></p> <ul style="list-style-type: none"> ・挨拶、自己紹介、聞き返し、確認、お礼 ・対人場面での練習問題 	<p><A. 報告文とは？></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ハンドアウト（要旨＋構成等）＋PPT＋小話 ・ジャンル別の紹介とそれらの特徴 ・今回の報告文＝描写文＋説明文＋意見文 ・報告文の実例の紹介
7/24 火	<p><II. 研究発表全体の流れ></p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表前の訂正の仕方等→発表の始め方→本論→発表の終わり方→質疑応答（質問の仕方、答え方） ・発表に関する質問応答の練習問題 	<p><B. 研究発表のタイトルと全体構成></p> <ul style="list-style-type: none"> ・助詞相当句を使って、短い記事や文章から表題を考える。 ・表題、各章の題、章の数字の付け方 ・参考文献の書き方
7/25 水	<p><III. 図表を使っての口頭発表練習1></p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料Ⅲ ・口頭発表に必要な語句一覧表 ・「自・他動詞」 	<p><C. 書き言葉と要約文></p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し言葉と書き言葉の違い ・話し言葉から書き言葉へ ・要約文の作り方
7/26 木	<p><IV. 図表を使っての口頭発表練習2></p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料Ⅳ ・口頭発表に必要な語句一覧表 ・「ている」「コ、ソ」 	<p><D. アンケート用紙の作り方：グループ作業1></p> <ul style="list-style-type: none"> ・実例（今回使ったニーズ調査）の紹介 ・テーマに基づいたアンケートの作成を考える。 ・質問は丁寧体、回答は普通体で。内容は簡潔に、名詞句で。
7/27 金	<p><V. 図表を使っての口頭発表練習3></p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料Ⅴ ・口頭発表に必要な語句一覧表 ・「受身形」 	<p><E. 研究発表の資料作成：グループ作業2></p> <ul style="list-style-type: none"> ・各グループでインタビューやアンケートの構想を練る。 ・研究発表会の担当を決める。（発表の順番と各担当） ・1期生のハンドアウトの紹介
7/30 月	<p><VI. 図表を使っての口頭発表練習4></p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料Ⅳ ・口頭発表に必要な語句一覧表 	<p><F. 研究発表の資料作成：グループ作業3></p> <ul style="list-style-type: none"> ・インタビューやアンケートの準備 ・テーマの全体構想 <p>→午後はインタビューやアンケート調査の実施</p>
7/31 火	<p><VII. エピソード（＝小話）の作り方1></p> <ul style="list-style-type: none"> ・口頭発表の際に挿入するエピソードの作り方 ・資料Ⅶ：「接続節」 ・ンデスケド形＋タラ形＋テ形＋気持ちの表出 	<p><G. 研究発表の資料作成：グループ作業4></p> <ul style="list-style-type: none"> ・インタビューやアンケートの準備 ・テーマの全体構想 ・感想、意見、エピソード、質疑応答、等 <p>→午後はインタビューやアンケート調査の実施</p>
8/1 水	<p><VIII. エピソード（＝小話）の作り方2></p> <ul style="list-style-type: none"> ・口頭発表の際に挿入する小話の作り方 ・資料Ⅷ：「引用①、②」 	<p><H. 研究発表の資料作成：グループ作業5></p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究発表当日に配布するハンドアウト作成（ハンドアウトA 4／1枚…表題、キーワード、要旨、全体構成、参考文献） <p>→午後はインタビューやアンケート調査の実施</p>
8/2 木	<p><IX. エピソード（＝小話）の作り方3></p> <ul style="list-style-type: none"> ・口頭発表の際に挿入する小話の作り方 ・資料Ⅸ：「補助動詞」 	<p><I. 研究発表の資料作成：グループ作業6></p> <ul style="list-style-type: none"> ・インタビューの一部文字起こし ・資料作成（ハンドアウト＋PPT＋インタビューの一部紹介）
8/3 金	<p><X. 口頭発表練習：グループ作業7></p> <ul style="list-style-type: none"> ・発表の練習（感想、意見、小話、質疑応答、等） ・終了アンケート実施 	<p><J. 研究発表の資料作成：グループ作業8></p> <ul style="list-style-type: none"> ・資料提出 <p>→午後15：30－17：30 研究発表会（＝試験）</p>

4. 4 教材

「話す」教材は、主に酒井（2010）、（2006）を参考にした。「書く」教材は、主に三宅ほか（2012）を参考にした。が、このプログラムのシラバスのために新しく書いたり書き加えたりした学習項目も多々ある。このように、さまざまな教材を参考にして、複数の日本語教員の参加のもとに教材を作成した。教材は必然的に「目標」とそれを実現するための「方法」を含む。コーディネーターの役割は、プログラムの「目標」を的にタスクを定め、それを実現させるための「方法」、つまり、学習項目を定めることである。学習項目が定まったら、そこでたたき台になるような教材を提案し、それに基づいて教員の意見を集約し、再度考察して教材を修正し、再提案し、それを基に各授業担当教員がアレンジして最終的な教材が出来上がる、そこまでの過程を管理することである。

4. 5 到達目標

到達目標は理想的にはシラバスより前の段階で定めるべきものであるかもしれないが、シラバスの作成のあとで再度考えると、より細かく到達目標が掲げられる利点がある。

このプログラムでは、以下の4つの到達目標を掲げた。a) は「書く」の、あとの3つ、b) ~ d) は「話す」の到達目標である。

- a) 得た情報を簡潔にレポートにまとめられる能力を高める。 「書く」
- b) インタビューやアンケート調査を実施する際に必要な、また、口頭発表をする際に必要な談話管理能力（会話ストラテジーや社会言語学的能力）を高める。 「話す」
- c) テーマについて図表を交えながら客観的で分かりやすい口頭発表ができる能力を高める。 「話す」
- d) 言語的に自分の情動が伝えられる能力を高める。 「話す」

以上の4つの到達目標を踏まえて、以下の評価方法を定めた。

4. 6 評価方法

評価方法は主に到達目標に連動して定められなければならない。評価方法と到達目標とは密接な関係がある。評価については、その他に出席状況や教室活動における積極性などが評価の対象となる。ここでは、総括的評価を行う。期間が短いので、形成的評価はしない。また、基本的にグループ・ワークであるので、グループの中での個人評価を考える。コース最終日のプレゼンテーションがその主な評価対象となる。評価の対象となるものは、インタビュー、アンケート調査、ハンドアウト、プレゼンテーション資料、口頭発表に課されたタスク、発表全体の流れ、等である。このように到達目標に照らし合わせて、グループ評価を中心にして個人評価を考える。課されたタスクがグループ全体として一応なされていれば、それだけでC段階評価は保障することにする。

4. 6. 1 出席+教室活動参加度

出席と教室活動の参加度により、100点満点の内、10点分をここで評価する。1クラス欠席すると、マイナス0.5点となる。

4. 6. 2 グループによる研究発表

「話す」「書く」をそれぞれ45点満点とし、4つの到達目標に基づいて、それぞれ4段階評価（A段階=45点、B段階=36点、C段階=27点、D段階=18点）で評価する。ただし、「話す」の評価

項目は3項目あるので、その中には10点満点（10点、8点、6点、4点）もあれば、25点満点（25点、20点、15点、10点）もある。いずれも4段階評価である。

4. 6. 3 4段階評価

岡山大学ではA（A+もある）、B、C、Dの4段階評価である。それを踏襲する。

A段階：とてもいい。問題がない。到達目標を十分達成している。

B段階：いい。問題点が少ないか、小さい。到達目標を十分達成している。

C段階：改善すべき問題点はあるが、全体として到達目標をほぼ達成している。

D段階：不十分である。問題あり。到達目標を達成したとは言えない。

4. 6. 4 修了条件

修了条件は以下の通りである。

- 1) 出席が3分の2以上であること。
- 2) 総合成績が60点以上であること。

4. 6. 5 到達目標とチェック項目

ここでは到達目標と評価のためのチェック項目を述べる。チェック項目のそれぞれは到達目標に照らし合わせたものである。

以下、表4に到達目標と評価のためのチェック項目を示した。

表4：到達目標と評価のためのチェック項目

	＜書く＞45点満点	＜話す＞10点満点	＜話す＞25点満点	＜話す＞10点満点
到達目標	a) 情報を簡潔にレポートにまとめられる能力を高める。	b) 交渉の際や口頭発表の際に必要な談話管理能力（会話ストラテジーや社会言語学的能力）を高める。	c) テーマについて図表を交えながら客観的で分かりやすい口頭発表ができる能力を高める。	d) 言語的に自分の情意を伝えられる能力を高める。
チェック項目	・ハンドアウト全体の構成とバランスと趣旨の展開（表題、キーワード、章の題や数字、段落、参考文献） ・話し言葉と書き言葉の混交の有無	・社会言語学的な面からみた発話の適切性（丁寧さ、待遇表現、普通体、男女言葉、等） ・対人関係の場面における会話ストラテジーの運用（聞き返し、あいづち、口頭発表を円滑に進めるための表現）	・図表の説明に必要な、書き言葉の語彙や表現の使用状況とその適切性	・話し手の情意（例：エピソード）を聞き手に伝えるための言語テクニクの運用（接続節、引用節、補助動詞、陳述副詞、等）

4. 6. 6 終了アンケートの調査結果

今回の交流プログラムに対する受講生側から教員側への評価も、この評価の中に入れておかなければならない。終了アンケートの結果は第1部に掲載した。

今回は、基本的に形成的評価は実施しなかった。が、毎日の授業における評価も考慮してはどうか、という意見も授業担当講師から出た。また、評価項目の細目をあげて、一つ一つに点をつけていった方が分かりやすいのでは、という意見もあった。評価に関しては、参加者たちは嫌と

いほど自国では受けているので、2週間の短期プログラムでは別の観点から評価を試みたいという気持ちが筆者にはある。できれば、彼らの現時点での日本語能力は考慮しないで、単純にこのプログラムの中で学習したことだけでもっと焦点を当て、学習項目が実際にどれだけ「話す」「書く」の中で使われたか、という観点だけに絞るこんでもいいのではないかと思います。我々は能力試験の実施を求められているわけではないのであるから。

今後、評価について、教員間でのさらなるコンセンサスが必要であると思う。

5. 考察と今後に向けて

中国での日本語教育ではプロジェクト・ワークの類は教室活動としてあまり取り上げられていないようである¹⁰⁾。コミュニカティブな教授法は文型練習ほどは盛んでないことによるのかもしれない。しかし、今回、参加者は問題なくプロジェクト・ワークに取り組んでいた。それが終了アンケート調査結果にも出ており、プログラムは、大体において満足できるものであったと思われる。将来的にも増えるであろう、こういった大学間交流プログラムにおいて、それが日本で行われる場合、究極的に我々に問われるのは、日本でしかできない、地元でしかできない、特色ある日本語・日本文化プログラムとは何か¹¹⁾、ということである。その答えの一つが今回のプロジェクト・ワークではないかと考えている。今後、午後のビジターセッション（インタビュー含む）をさらに生かす形でのディスカッションやディベートといったタスクが導入できたら、プログラムがより充実したものになるのではないかと考えている。また、言うまでもないが、教材に関してさらに質の良いものを目指す必要がある。今後は日本語・日本文化に限らず、地元の企業や機関を巻き込んだ形（企業見学、企業からの講師招聘、インターンシップ）の協働プログラムの‘開発’も目標になるのではないかと考えられる。いずれにしろ、こうした短期留学プログラムを長期的に成功に導くためには、受け入れる側と送り出す側の両者にとってプラスになるようなものを探っていくかねばならないだろう。今回示したプロジェクト・ワークが、今後増えるであろうと予想される大学間の短期留学プログラムに対して、何らかの参考になればと思う。

最後に、このプログラムに参加している者として、交流プログラムについて一言述べたい。岡山大学の言語教育センターによる（特に初修外国語系教員が主として参加している）海外の大学との大学間短期交流プログラムは、今回も入れて8回目である。韓国成均館大学の6回と、この上海理工大学の2回である。こういった大きなプログラムは1つの小さな語学系だけでは実施できない。その人的ネットワーク（教員、事務、学生、市民を含む）や予算的なバックアップ（大きな予算は必要ないが）があってできることである。また、それだけでは実現できない。そこには忙しい中にも交流プログラムの意義を理解し、参加しようとする人たちの熱意がなくては成功しない。特に、直接、企画をする立場にある教員側にそれが必要とされる。大学間短期交流プログラムとは、企画する側、つまり教員側から見れば、大学の構成員としての自分たちのグループ・ワークが試されることでもある。大学におけるグループとしての自分たちの人的資源のあり方が問われることでもある。岡山大学ではそれらがあったからこそ、こういった手作りのプログラムが8回も続いているのである。ある意味で岡山大学では成功していると言える。このことを我々はもっと誇りに思っているのではないだろうか。こういった、さまざまな畑の語学教員らが集まって一つのプログラムに参加できる大学の態勢作り、少しでも貢献できることを幸せに思う。

[注]

1) 一般に短期留学は1学期、または、1年間の留学を指す。3か月以内の留学については「超

- 短期留学」、または、「ショートステイ」と呼ぶことが多いようである。
- 2) レディネス調査とは、学習についての準備状況を調べることを言う。日本語能力のレベル、その他の外国語の既習状況、学習環境、学習ストラテジーのことを指す。
 - 3) 「話す」力を筆記によって図ろうとするテストで、酒井（2006）にあるように、単文の連続をつないで一つの複文にできるかどうかのテスト。個人的な見解であるが、中級以上の「話す」力を、この筆記テストでかなり測ることができるのではないかと思っている。
 - 4) ピア・ラーニングとは、協働学習のこと。学習者間で自発的に活動に参加し、対話を中心に、互いに社会的関係を築きながら、学習する方法である。
 - 5) 口頭発表をより魅力的なものにするために、発表者に課題としてエピソード（小話）を一つ紹介させた。このことについて、4. 3で触れた。
 - 6) 社会言語学的能力とは、言語使用場面や言語使用者間の関係等、さまざまな社会言語学的要因を考慮した上での言語運用能力を言う。敬語の使用、普通体の使用、男言葉・女言葉、等を指す。
 - 7) 談話管理能力とは、ここでは対人関係の中での発話であるということが十分考慮されているかどうか、各場面にふさわしい適切な対人配慮ができるかどうか、ポライトネスも含めて聞き手の立場が充分配慮された公正なものであるかどうか、コミュニケーション上で何か問題が生じた場合の言語的対応は補償されているか、等の事項が管理できる能力を言う。さらに、談話管理能力とは、会話ストラテジー（あいづち、聞き返し、ターン、フィラー、訂正、追加、相手へのカバー、余剰性、等）や社会言語学的観点から見た言葉の運用（敬体、普通体、待遇表現、男言葉・女言葉、罵倒語、等）場面における運用時期や運用のタイミングが考慮された使い方であるか、等の事項が管理できる能力を言う。
 - 8) シラバスには、構造シラバス、機能シラバス、場面シラバス、技能シラバス、タスクシラバスなどがあるが、今回の交流プログラムの中心的なシラバスは何か、と問われれば、技能シラバスとタスクシラバスということになる。
 - 9) 第1回目のときは、受講生から最終研究発表のための準備期間が十分なかったことが指摘されたので、今回は準備期間に余裕を持たせ、授業の中でもある程度カバーできるようにした。
 - 10) 上海理工大学外国語学院日語系主任副教授である周先生より、直接、お聞きしたことである。
 - 11) 第1回韓国成均館大学校交流プログラムの最終アンケートの中に、「韓国ではできない授業をやってほしい。」というコメントがあった。それ以来、コーディネーターとして、いろいろ模索している。

[参考文献]

- 1) 伊豆原英子、獄逸子、酒井峰男、その他全8名（1990）「初級段階での課題達成プログラム」『名古屋大学日本語学科日本語教育論集第1号』pp. 1-27.
- 2) 岡崎眸（2005）「教室活動論」日本語教育学会編『新版日本語教育事典』大修館書店
- 3) 国際交流基金（2006）『日本語教師の役割／コースデザイン』ひつじ書房
- 4) 斎藤里美（2005）「コースデザイン」日本語教育学会編『新版日本語教育事典』大修館書店
- 5) 斎藤美智子、酒井峰男（2008）「短期日本語・日本文化プログラム実践報告と考察」『日本総合学会誌第7号』pp. 37-43.
- 6) 酒井峰男（2010）『日本語中級「話す」総合』岡山大学出版会
- 7) 酒井峰男（2006）『中上級用教材：エピソードを話す』三恵社

- 8) 酒井峰男 (1998)「日本語中上級者の話す能力を高めるための学習項目 —学習者の体験談を通して—」『岡山大学留学生センター紀要第5号』 pp. 35-49.
- 9) 佐藤由利子 (2011)『日本とEU諸国における短期留学の特徴と高等教育の国際化に果たす役割の比較研究』平成2022年度 科学研究費補助金 基盤研究C 研究課題番号20530765
- 10) 田中望、斎藤里美 (1993)『日本語教育の理論と実際』大修館書店
- 11) 友松悦子 (2008)『中級日本語学習者対象 小論文への12のステップ』スリーエーネットワーク
- 12) 日本語教育学会編 (1991)『日本語教育機関におけるコース・デザイン』凡人社
- 13) 日本語教育学会編 (1990)『日本語教育ハンドブック』大修館書店
- 14) 三宅節子、佐藤美穂、加納直子、大野呂節子、酒井峰男 (2012)『成均館大学校交流プログラム 日本語<書く>教材』非売品
- 15) Nunan, D. (1988) *The Learner-Centered Curriculum*, Cambridge University.

資料：上海理工大学交流プログラムのためのニーズ調査 (2012)

名 前： _____
カタカナ名： _____

質問1：あなたの日本語のレベルは？

3級 2級 1級 その他 ()

質問2：日本語の漢字はいくつぐらい知っていますか。選んでください。

読める漢字：300字 1000字 2000字 その他 ()

書ける漢字：300字 1000字 2000字 その他 ()

質問3：日本語を何時間ぐらい勉強しましたか。

300時間 600時間 900時間 その他 ()

質問4：1週間以上、日本に滞在した経験がありますか。

0回 1回 2回 3回以上

質問5：今、特にどういう日本語の能力を伸ばしたいですか。

()

質問6：日本語を使って、将来、何かしたいといますか。

「はい」 「いいえ」

* 「はい」と答えた人 → どんなことをしたいですか。

()

質問7：今、日本語の勉強について何か悩んでいることがありますか。

()

質問8：コンピューターで日本語の文が作れますか。

はい いいえ

質問9：岡山大学での上海理工大学交流プログラムの終わりに「研究発表会（1グループ30分）」があります。何かについてグループで調べて発表します。たとえば、あなたは何について発表したいですか。

()

*自由記述（ほかに何か書きたいことがあったら、書いてください。）

*御協力、どうもありがとうございました。

